

野 外 活 動 の 実 態 調 査 報 告

—— 登山の実態とその指導に関する問題点 ——

浜 田 健 司
徳 久 球 雄*

I 目 的

都市生活者の自然への憧憬は、都会を離れて自然の中にスポーツ・レクリエーション活動を求める傾向へと高まり、それは年々増加の一途をたどっている。本研究の目的は、これらの多くの人々の野外活動の実状を知り、中でも大きな領域を占めるとされる登山活動について、その実態を把握し今後の指導のあり方を見出だそうとすることにある。

前回は、^{**}昭和44年夏山における谷川岳・立山剣岳及び上高地にむかう登山者について調査し、その登山人口の構造を分析報告したが、今回は主に昭和48年夏山を中心に、調査対象の拡散により一般的登山傾向を再確認し、更に諸々の問題を含んでいると思われる単独行について焦点を絞り、その実態の分析を試みようとするものである。

II 方 法

○調査方法 昭和43年月刊雑誌“山と溪谷”10月号にアンケートを掲載し、回答を得たものを集計した。^{***}

○調査対象 “山と溪谷”の読者(回答者 2869名)

III 結 果 と 考 察

1) 一般登山者の全体的傾向

現在全国で約700万～800万と推定される登山人口の男女比率は、女子が若干上回っていると思われるが、今回のアンケート回答者は男子が75%を占めており(購読者層に多少のかたよりはあると思われるが)、やはり積極的な登山活動は男子が優勢であることを示しているようである。

年令的には15～20才台で全体の約85%を占め、また学生・会社員次いで公務員の順に多い。これらの登山経験については<図3>のように4～5年が最も多く33.3%、3年以下が31.4%となっており約65%を占めている。更にその回数及び一昨年の登山日数などから

* 青山学院大学

** 「登山人口の構造分析と指導の問題について」浜田健司・徳久球雄
東京女子体育大学紀要 第7号

*** 質問項目については紙面の都合上割愛する

図1

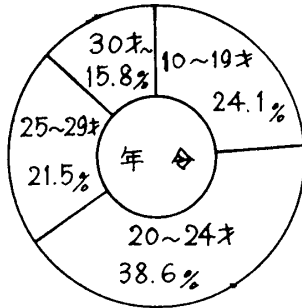


図2

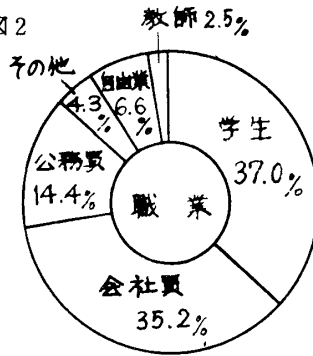


図3

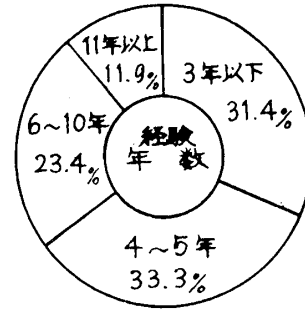


図4

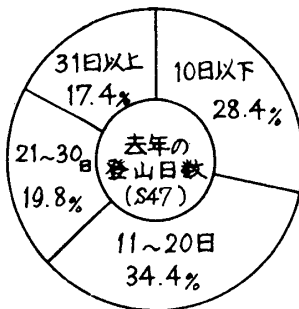


図5

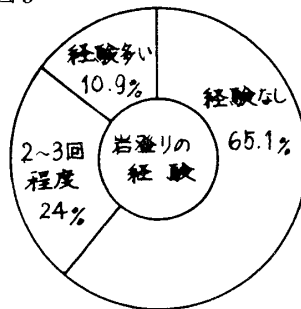


図6

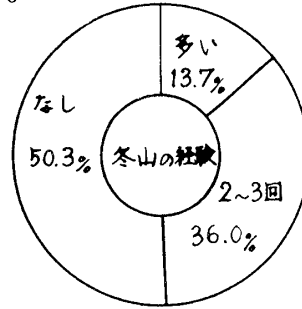


図7-①

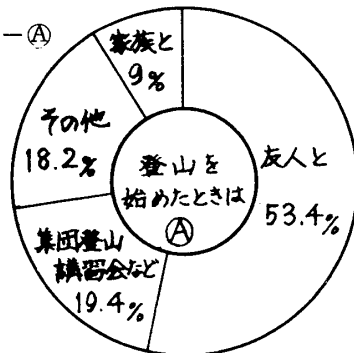


図7-②

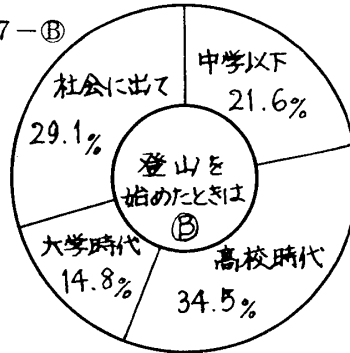


図8-1 登山訓練を受けたことが

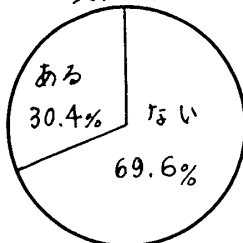


図8-2 登山教室に入りたい

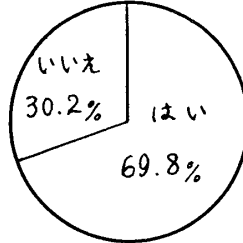
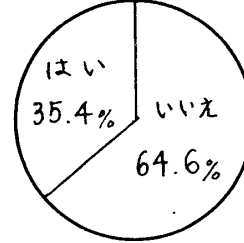


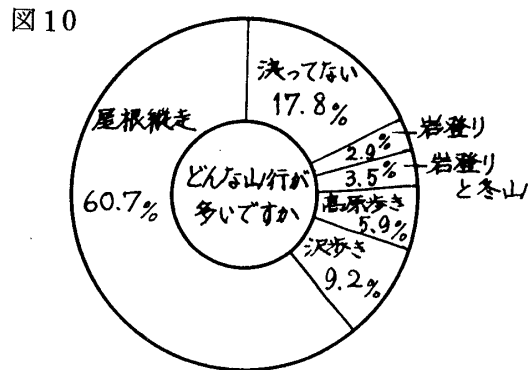
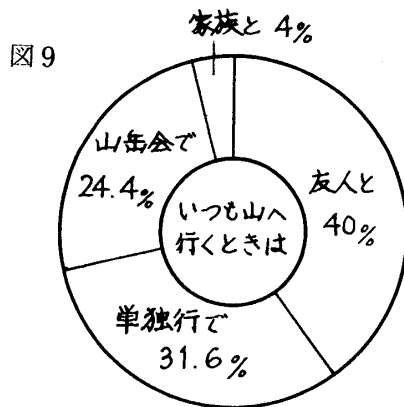
図8-3 登山の団体に所属していますか



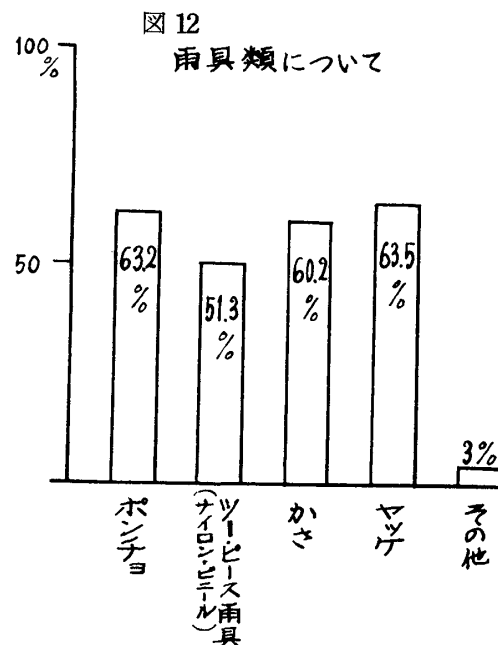
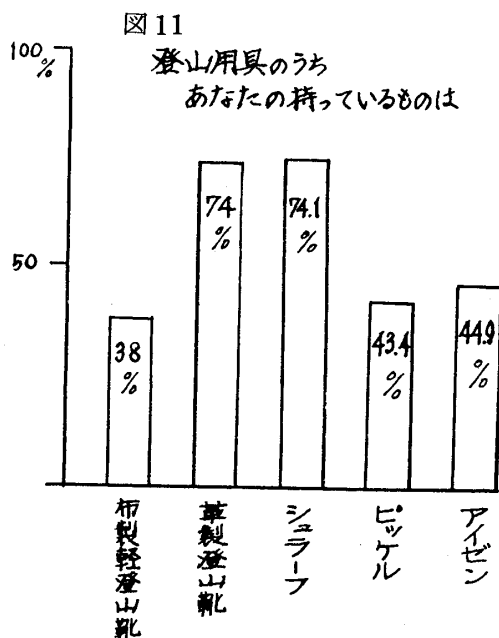
もかんがみ、キャリアの点で比較的浅いという実態が予想された。また登山を始めた動機は“友人と”が53.4%と高いが、集団登山・講習会などと答えたものが19.4%あり集団登山が相当の影響をもっていることがわかる。その時期はく図7-②の通りで、これらのうち過去に登山に対する組織的な訓練を受けたことのないものが69.6%、もし登山教室の

ようなものがあればそれに入って訓練を受けたいと希望するものが69.8%となっており、ほぼ一致した数値を示しているのが注目される。

次に、どんな山行形態が多いかという間に対してはく図10の通りであり更に、岩登りと冬山経験についてはく図5く図6のようであった。岩登りをする意志のないものの方が冬山に対する意志なしのものよりも多いのは危険度の関係からと思われる。



“いつも山に行く時は誰と行くか”に対して、“友人と”が40%，“山岳会で”が24.4%となっており，“単独で”と回答した者が31.6%，2869名中908名もあり，単独行が増える傾向にあると予想される。



登山者の山に対する考え方を調べる指標として“好きな山の本”“自己の登山に影響を与えた本”“理想とする登山家”というような項目を設けたが非常に多くの種類の回答があり，比率的にあげることは困難である。しかし全般的にみて外国の翻訳書より日本の書物，しかも厳しい岩壁登攀の記録よりも静観的な山の本の方が多くの読者をもっているよ

図 13

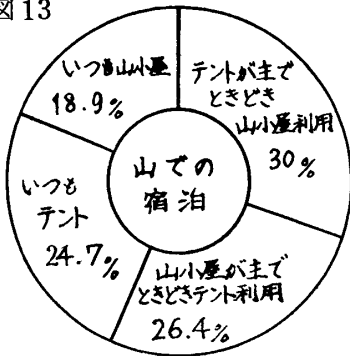
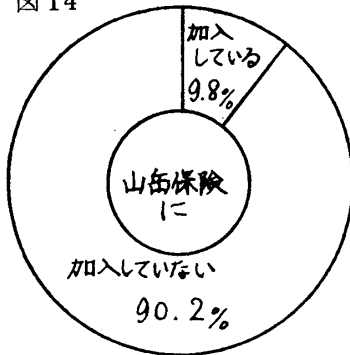


図 14



うである。また“自分自身について最もあてはまることばはどれか”という設問に対しては、ワンダラー、ハイカー、マウンテニア、アルピニスト等の順となっている。これら登山者の登山も含めて“第一の趣味は”との設問で、登山と答えたものが69%、その他の趣味として写真、音楽、読書、スキー、絵画など非常に多彩で、必ずしも登山ばかりでなく登山も趣味の一つであるという、現代の若者の登山に対する姿がうかがえる。

以上のように数値と傾向から、ここに現われた登山者の一般的な姿はアルピニストではなくワンダラー的な傾向が強く、自然への憧憬と自己への沈潜を深めつつ自己の山行を進めていくようなタイプが多いといえる。

2) 単独行について

一般的登山傾向から現代の登山者像がうかがわれたが全体として単独行が多い傾向にあることも確認した。そこで比較的単独行のケースが多いと回答した908名を抽出し、その実態を分析した。

年令的には20~24才が40.5%、次いで25~29才が23.5%と半数以上が若年層で占め一般的傾向とも似かよった

図 15

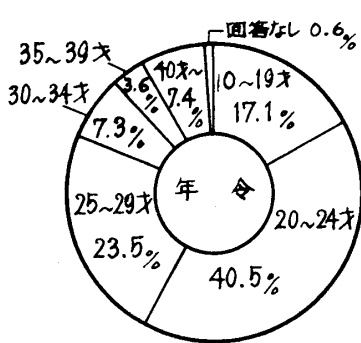


図 16

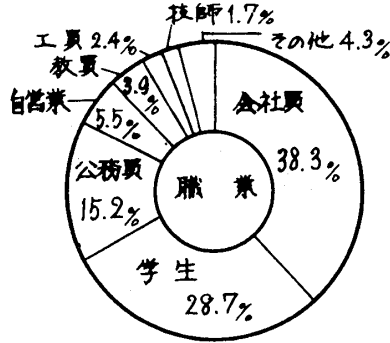


図 17

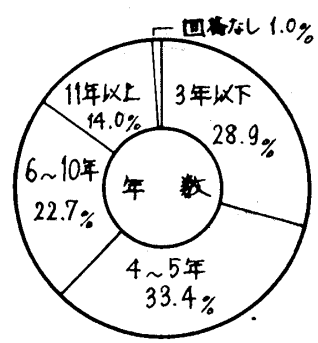


図 18-1

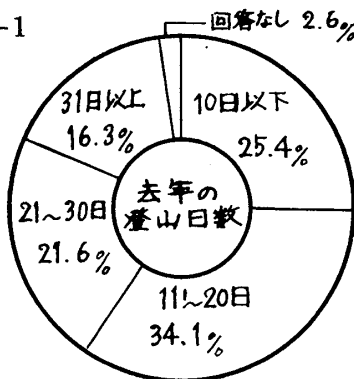


図 18-2

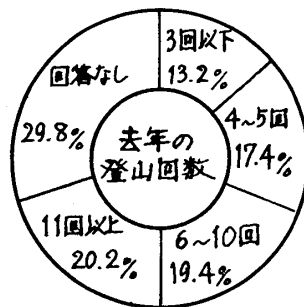


図 19-1

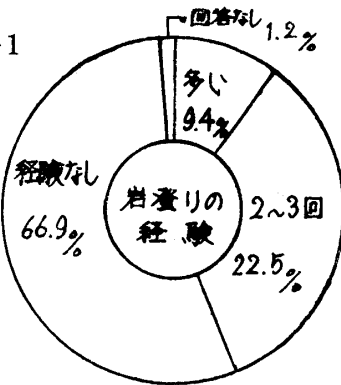


図 19-2

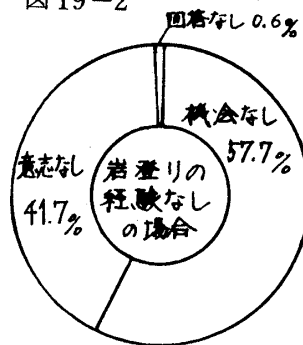


図 20-1

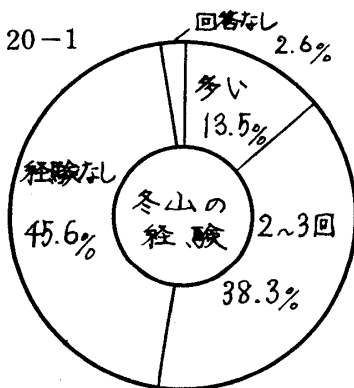


図 20-2

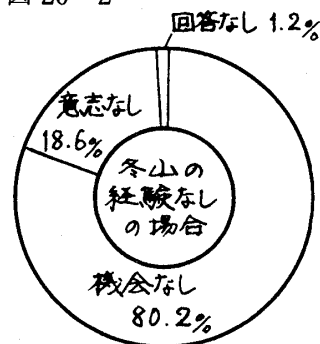


図 21

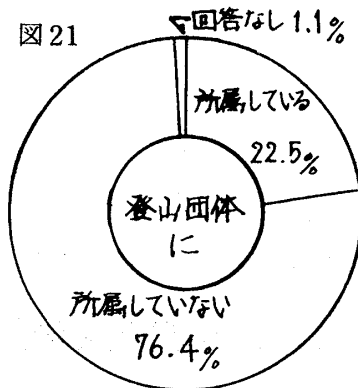


図 22-1

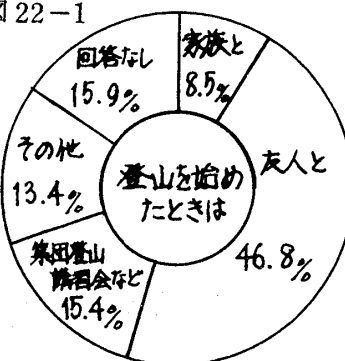
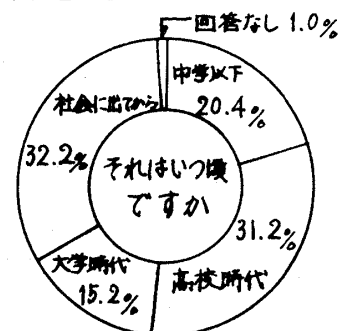
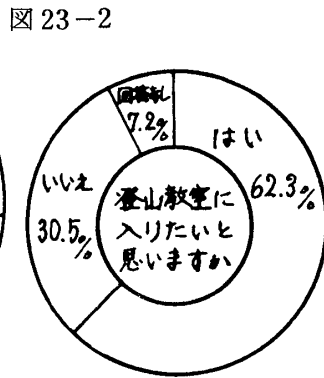
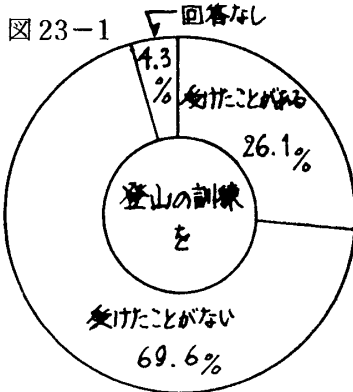


図 22-2



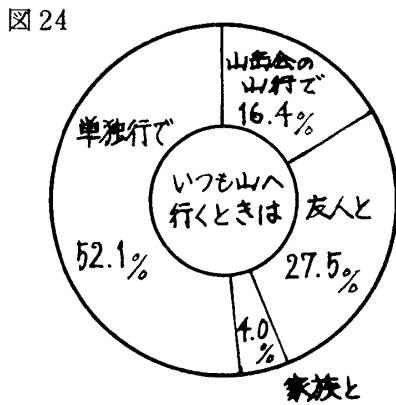
値を示しているが、職業別では会社員・公務員など社会人が多いのが目につき、一般的傾向で最も多かった学生の占める割合が減少しているのが顕著な相違である。社会人の場合グループを組むことは容易ではなく時間的な制約も多いと思われるが、単独行する場合には時間も含めて自身の調整のみでそれは可能であり、好まれる一因ではないかと思われる。

経験年数や登山回数等は一般的な傾向と変わらずキャリアの点でも浅いことがうかがえる。岩登りや冬山の経験もまれである。但し、経験のないものでも機会があればやってみようという意志のあるものは多く、特に冬山を機会があればやりたいと希望するものが80.2%と大きな数値を示している。登山を始めた動機、山岳団体への所属等は一般的傾向と大差なく、登山の基礎的訓練を受けた者も少ないことがわかる。しかし、初級・中級・



上級とレベルに合わせた登山教室等があたば受講したいと希望する者が62.3%であることは、注目したい点である。

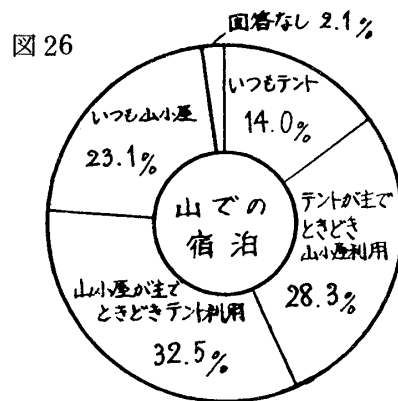
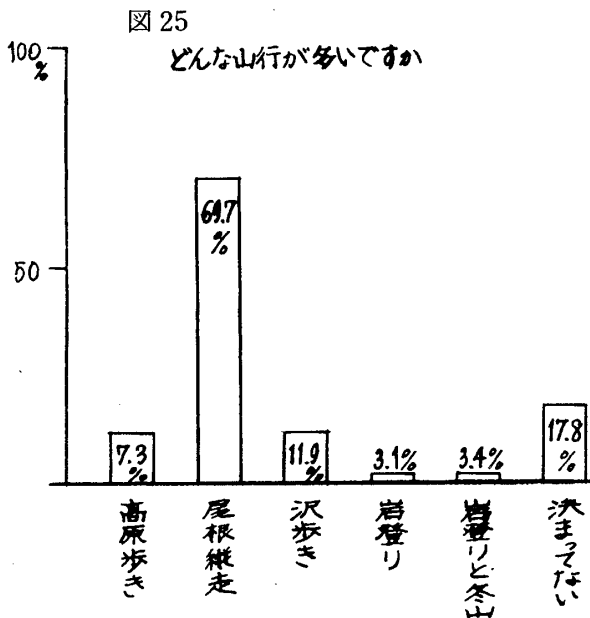
山行形態の中で比較的単独行が多いとする908名を更に細かくみると〈図24〉の通りで、友人や山岳会で出かけるものもわずかにあるが大半は純粹の単独行である。



行である。

次に、山での事故については“登山中にケガ・病気をしたことがありますか”の設問に対して約4分の1のものがあると答え、捻挫・打撲・骨折あるいは裂傷・さっか傷等のケガや風邪・下痢等の病気をしている点も見逃がせない。又、遭難については14%のものが道に迷って遭難しかけたことがあると回答していることも重視したい。これらの90%以上は山岳保険に加入していない実態についても今後の指導の問題点の一つといえそうである。

装備については〈図27〉〈図28〉に示す通りであるが



革製登山靴・シュラフの所有率が高いことは好ましい傾向であり、雨具もポンチョ・ヤッケ等、それぞれ時に応じて工夫利用されていることがうかがえる。

山での宿泊については、テントと山小屋の両用というのが多くみられ、特に一般的傾向より山小屋の利用率が高いという特徴が明らかで、個人的行動が主体となっている現在の

第 1 表

あなたの好きな本

(著 書)	(著 者 名)	
孤高の人	新 田 次 郎	137人
単 独 行	加 藤 文 太 郎	79人
氷 壁	井 上 靖	47人
日本百名山	深 田 久 弥	34人
栄光の岩壁	新 田 次 郎	32人
霧の山稜	加 藤 泰 三	15人
山靴の音	芳 野 満 彦	14人
たった一人の山	浦松 佐美太郎	14人
山と溪谷	田 部 重 治	14人
白きたおやかな峰	北 杜 夫	14人
縦 走 路	新 田 次 郎	14人
アルプス登攀記	ウ ィ ン パ ー	10人
強 力 伝	新 田 次 郎	10人
我愛する山々	深 田 久 弥	9人
霧 の 山	安 川 茂 雄	7人
山のパンセ	串 田 孫 一	7人
風雪のピバーク	松 濤 明	7人
ひとりぼっちの山	安 川 茂 雄	7人
喜作新道	山 本 茂 美	7人
青春の山を想う	岡 田 喜 秋	7人

(908人中)

第 2 表

あなたの登山に影響を与えた本

(著 書)	(著 者 名)	
孤高の人	新 田 次 郎	117人
単 独 行	加 藤 文 太 郎	78人
氷 壁	井 上 靖	43人
日本百名山	深 田 久 弥	18人
栄光の岩壁	新 田 次 郎	15人
風雪のピバーク	松 濤 明	14人
青春を山にかけて	植 村 直 己	10人
我愛する山々	深 田 久 弥	9人
アルプス登攀記	ウ ィ ン パ ー	9人
処女峰アンナ・プルナ	エ ル ゴ ー ク	7人
山を考える冒険と日本人	本 多 勝 一	7人
山と溪谷	田 部 重 治	5人
この山にあふれる誓い	富 山 県 警 察 本 部	5人
青春の穂高	青 柳 健	5人
錆びたピッケル	新 田 次 郎	5人
青春の山想	岡 田 喜 秋	5人
秋の山旅	榎 有 恒	4人
山への祈り	安 川 茂 雄	4人
たった一人の山	浦松 佐美太郎	4人
山 研 究 と 随 想	大 島 亮 吉	4人

(908人中)

第 3 表

あなたの理想とする登山家

加 藤 文 太 郎	241人
植 村 直 己	64人
深 田 久 弥	59人
芳 野 満 久	40人
大 島 亮 吉	36人
松 濤 明	31人
今 西 錦 司	29人
小 西 政 継	23人
榎 有 恒	23人
ガストン＝レピフェ	15人
ヘルマンプール	14人
串 田 孫 一	13人
ヒ ラ リ ー	12人
奥 山 章	12人
木 暮 理 太 郎	11人
ウ ィ ン パ ー	11人
田 部 重 治	11人
安 川 茂 雄	9人
田 淵 行 男	8人
白 簾 史 郎	8人

(908人中)

第 4 表

あなたにあてはまる言葉

ワ ン ダ ラ ー	30.8%
ハ イ カ ー	17.8%
マ ウ ン テ ニ ア	15.2%
ア ル ピ ニ ス ト	13.1%
ク ラ イ マ ー	2.8%
ツ ー リ ス ト	2.4%
バ ッ ク ・ パ ッ カ ー	0.6%
そ の 他	12.2%
山 や 世捨て人	
岳 人 山 狂 い	
気まぐれ 漂 白 者	
彷徨者 自 由 人	
山 ざ る ブ ッ シ ュ マ ン	
風 来 坊 さ ま よ い 鳥	
山 旅 派 山 パ カ	
一 人 者 山 好 き	
単 独 行 者 ピ ー ク ・ ハ ン タ ー 等	
回 答 な し	5.1%

“あなたに該当する呼称は何であるか”に対し第4表のように、登山者自身自らワンダラーであると回答した者が最も多く、次いでハイカーであるといっている。アルピニストマウンテニアと回答した者が少ないことも現代の登山者層の特徴といえそうである。

これら登山者の登山以外の趣味についてみると、スポーツ・音楽・写真・旅行・読書・釣等、非常に多種多様で、個人の多様な趣味の一つとして登山も行っているという、一般的傾向と等しく共通している。

又、海外登山についてみるとく図 〉の通り行きたいが機会がない、ぜひ行きたいとするものが半数以上を占め海外登山にも興味を持っていることを示している。併せて、関心のある海外の山についてもマッターホルン、ヒマラヤ、モンブラン等の著名な山にあこがれをもっているようである。

第 5 表

登山以外の趣味

趣味の項目	%	種 別
ス ポ ー ツ	30.1%	スキー(123人)スポーツ(16人)サイクリング(16人) ゴルフ(10人) テニス(24人) スケート(11人) 野球(9人) 水泳(7人) 空手(9人)剣道(4人) アクアラング(4人) ボーリング(4人)その他(39人)
音 楽 (鑑賞・演奏会)	17.5%	音楽(100人)レコード鑑賞(32人)ギター(12人) オーディオ(4人)ドラム(2人)その他(9人)
写 真	16.1%	写真(132人)カメラ(10人)8ミリ(4人)
旅 行	12.1%	旅行(87人)ドライブ(20人)古寺探訪(3人)
読 書	11.6%	読書(103人) 古典(2人)
釣 り	7.3%	釣り(66人)
絵 画	6.0%	絵画(47人)油絵(3人)美術(2人)スケッチ(1人) その他(1人)
囲 碁・将 棋	2.6%	囲碁・将棋(24人)
創作・文芸・音楽	2.5%	作詩(5人)童謡(2人)文学(2人)作曲(2人) 俳句(2人) その他(10人)
園 芸	2.4%	園芸(22人)
ハ ム	2.4%	アマチュア無線(22人)
気 象・天 文	2.3%	天体観察(13人)気象(4人)山岳気象(3人) その他(1人)
蒐 集	1.8%	切手蒐集(9人) その他(7人)
自 然 観 察	1.1%	野鳥(4人) 草物(6人)
そ の 他	9.4%	映画・プラモデル・演劇・他
N・A(回答なし)	2.0%	

第 6 表

登山を含めた趣味

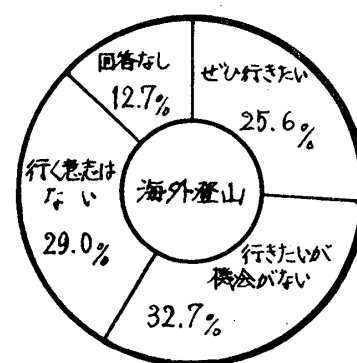
趣味の項目	%	種 別
登 山 (山歩き)	65.0 %	登山 (589人) 冬山縦走 (1人)
ス ポ ー ツ	9.4 %	スキー (48人) スポーツ (8人) テニス (5人) サイクリング (5人) 水泳 (3人) オリエンテーリング (2人) 野球 (3人) その他 (1人)
旅 行	5.7 %	旅行 (49人) 古寺探訪 (2人) 古都巡下 (1人)
読 書	4.8 %	読書 (36人) 文学 (6人) 山岳図書 (2人)
写 真	4.6 %	写真 (29人) カメラ (10人) 山岳写真 (2人)
音 楽 (鑑賞・演奏含)	4.3 %	音楽 (24人) オーディオ (3人) 鑑賞 (3人) 合唱 (3人) ドラム (2人) 尺八 (2人) その他 (3人)
釣 り	1.8 %	釣り (15人) 拓本取り (1人)
自 然 観 察	1.5 %	自然に親しむ (5人) 自然観賞 (4人) 野鳥観察 (2人) その他 (3人)
気 象 ・ 天 文	1.3 %	天文 (7人) 気象 (2人) 雲 (2人) 雪 (1人)
絵 画	1.2 %	絵画 (11人)
そ の 他	3.1 %	アマチュア無線・散歩・盆栽・酒・その他

第 7 表

関心のある海外の山

マッターホルン	(ヨーロッパ)	12.1 %
ヒマラヤ	(ヒマラヤ)	8.3 %
モンブラン	(ヨーロッパ)	7.0 %
キリマンジェロ	(アフリカ)	5.8 %
エベレスト	(ヒマラヤ)	3.1 %
マッキンレー	(北 米)	3.0 %
アイガー	(ヨーロッパ)	2.1 %
アンデス	(南 米)	1.8 %
アンナプルナ	(ヒマラヤ)	1.7 %
キナバル	(北ボルネオ)	1.0 %
玉山	(台 湾)	0.9 %
マウントクック	(ニュージーランド)	0.7 %
K ₂	(ヒマラヤ)	0.7 %
グランドジョラス	(ヨーロッパ)	0.4 %
マナスル	(ヒマラヤ)	0.4 %
そ の 他		5.5 %
回答なし		45.5 %

図 31



これらのことから、単独行者についてはアルピニストではなくワンダラー的な傾向が強いという前述の一般登山者像と変わりはなく、岩登り、冬山の経験をもたず行動の規制を強いられると思われる山岳会などのようなパーティ構成による登山を嫌い、きわめて少数の友人との山行あるいは個人での山行を好む姿を浮きぼりにしている。更に、新田次郎の“孤高の人”，加藤文太郎の“単独行”等の小説に影響を強く受け、登山経験だけは4～5年と積んではいるが、登山書にお

いては古典的なものあるいは系統的な技術書に触れているものが少なく、ムード的な登山を考える傾向が強いといえる。しかし単独行の場合、遭難事故の確認あるいは救助が困難を要することであり、増加の傾向にあることは憂慮すべきと思われる。

以上の結果より考察すると、登山を始めた時期は高校時代あるいは社会に出てからで、友人とや集団登山がきっかけとなったようであるが登山の指導については、殆んど受けたことがなく家族が指導にタッチしていることも極めて少ない。前回の調査でも、登山の基礎的指導を受けたことのある者の大半は、“社会に出てから”“山岳団体から”等と回答している。これらの登山者の多くは学校時代に登山は経験するが、登山技術の指導は殆んど受けていないというのが現状のようである。

単独行者であっても登山教室・講習会等、機会があれば是非受講したいと希望しているものが大半であり、これら多くの未組織登山者の欲求に応える何らかの方策をこうじることが肝要であろう。

登山活動は優秀なリーダーのもとにパーティの編成がなされることが望ましく、正しくそして安全な登山についての問題をとらえるとき、安全指導の基準化と指導者の養成、更に中学校・高等学校等の教育機関を通じて早い時期から繰り返し基礎的訓練及び指導の機会を得るように考慮すべきではないかと痛感する。

いたずらに規制したり制度を作ったり、組織に入らねば登山活動ができないようにすることが本質ではなく、登山のあるべき姿を自主的にとらえられることが大切なのではないだろうか。

図 32

